

Do you know how to discuss ?

自由に楽しく議論しよう！

「議論（ぎろん）」とは、意見を出し合って結論を出すことを言います。「討論（とうろん）」は意見を戦わせて勝敗を付けることです。根本的にこの2つの言葉の意味は異なります。学校教育の中でも「議論」を重視することが当たり前になり、ジグソー法などのグループワークで「議論」する場面が増えていきます。また、現在の大学の授業は、講義形式ではなくディスカッション（議論）形式が多く採られています。一方で「議論」の本質をきちんと知っておかないと、十分な成果は得られません。社会生活においても絶対に必要となるスキル（技能）、「議論の方法」を学びましょう！



なぜ「議論」が必要なの？



「議論」には二つの目的があります

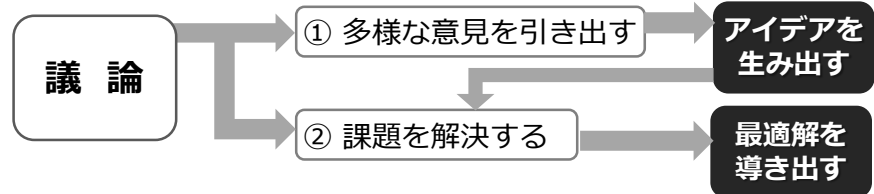
「議論」を行う目的には、次の二つがあります。①→②の順で展開させます。

① 多様な意見を引き出すこと

色々な立場の人とコミュニケーションを取りながら、様々なアイデアを聞き、多面的に思考していきます。意見が出しやすい、その場の雰囲気もとても大事です。多様な価値観を認め合い、自分の意見を押し付けずに、まずはどんどん意見を集めます。

② 課題を解決すること

意見が引き出された後、それらが何を示しているかを分析し、分類します。それらをまとめて、「正しい解」ではなく「最適解：相応しい解」を導き出します。さらにその解にも課題はないか、あらゆる場面を想定し、批判的に検討する力も必要です。



出典：筆者作成



社会が求める人の変化

高度経済成長以降、科学技術の発展に貢献できる人を育成する機運が高まり、「言われたことを早く正確にこなす人」「知識を沢山持っている人」が力を発揮できる人だと考えられてきました。近年の情報技術の発展で、人工知能が人間の記憶量をはるかに凌駕し、10～20年後には日本の労働人口の約49%が就いている職業において、それらに代替することが可能との推計結果が得られています（野村総研, 2015）。

では「機械にはできないこと」とは、何でしょうか。

それは、コミュニケーションを中心とした創造活動です。

これからの社会では「持っている知識を組み合わせ、自分の考えを述べられる人」「解のない課題に、最適解を導き出せる人」が求められます。そのために、議論のスキルはとても重要になってきます。

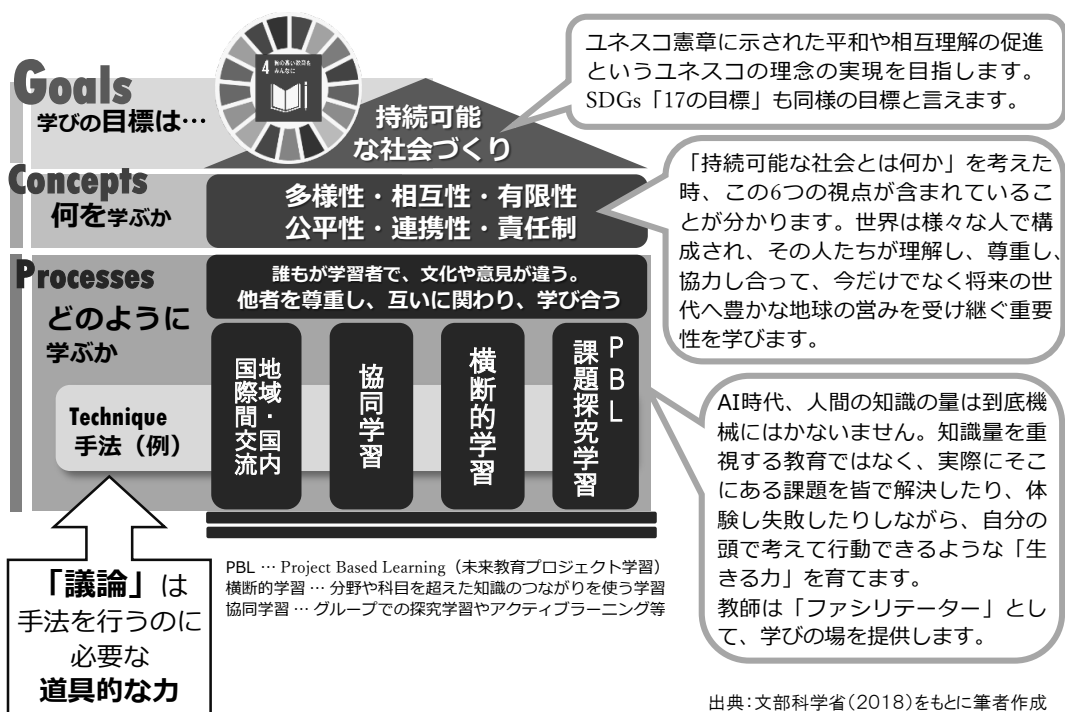


ESDの中での「議論」の位置づけは？

前号で紹介した、ユネスコが推進しているESD（持続可能な開発のための教育）の図（下記）を、もう一度見てみましょう。「議論」はどこに位置づくでしょうか。

「どのように学ぶか」では、他者を尊重し、互いに関わり合いの中で「持続可能な社会」の視点を学ぶことが示されています。そのための手法として、グループやペアで学ぶ「協同学習」が含まれています。「議論」は、協同的な学びをするためのツール（道具）にあたり、議論を学ぶことは、道具を使えるようになることと同じです。

例えば、よい作品や品物をつくるためには、道具の使い方を学び、うまく使いこなす必要があります。これと同じで、課題解決の方法を見つけるためには、議論のルールに則って質の良い議論をするスキル（技能）が必要なのです。



出典：文部科学省(2018)をもとに筆者作成



フィンランドの小学5年生が考えた「議論のルール」がすごい！



必要なのは「コミュニケーション力」と「議論を組み立てる力」

2000年、サンタクロースとムーミンの故郷であるフィンランドは、OECD学習到達度調査（PISA）結果が突如躍進し、読解力では1位になりました。これは世界を驚愕させ、様々な研究者が現在でもフィンランドの教育について研究を重ねています。

日本の読解力は、この時14位。では、何が違っていたのでしょうか？

フィンランドでは、少人数クラスをさらに班に分け、グループごとの学習を重視していました。おのずと話し合って意思決定する場面は多くなります。「自分にとって当然のことでも、誰にでも通じるとは限らない」ことを理解し、「なぜ？」と問い直すことや、自分の意見を理由づけて話すことが求められてきたのです。

これは、自分と違う他者に対する態度と考えると、一種の「グローバル・コミュニケーション」です。

日本人は、分かりきったことを説明するのが苦手です。ものごとの正しさよりも、正しいと主張するためのプロセスを学ぶことが、コミュニケーションに役立ち、思考力をつける近道です。



出典：北川 (2005)

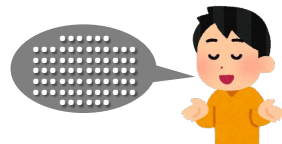
左の図は、OECD学習到達度調査で実際に出題された問題です。どちらの意見に賛成しますか？そして、どのように相手を説得しますか？右は、フィンランドの小学5年生が考えてルール化した10の「議論のルール」を7にまとめたものです。

① 他人の発言をさえぎらない



誰かが話し始めたら、最後まできちんと話を聞きましょう。特に日本語の場合、大事なことが後回しになる語順だということを認識しましょう。話の途中で別の人が「でもさあ…」と話し始めると、肝心な部分を聞くことがず、主張の本意も分かりません。一人が話し終わったら、その内容について「～はいいアイデアだと思う。でも私はこういう理由で、こうだと思う」という風に、建設的に話しましょう。

② 演説は禁止！



議論には、時間の制限がある場合が多いです。だからと自分の話をする、他の人の話が聞けなくなります。要点をすっきり分かりやすく話しましょう。目安は「2分以内」！

③ 話すときに、怒ったり泣いたりしない



議論の目的はあくまで「課題解決」です。感情的になるのは、課題解決を中心に置いていない自己中心的な態度です。「カチン」とくるたびに爆発したら、議論どころではなくなります。目的を達成するために、自分のことは置いておきましょう。もし感情が抑えられなくなったら、10秒間深呼吸しましょう！

議論のルール

フィンランド・メソッドをもとに作成

④ わからないことがあったらすぐに質問する



質問することで馬鹿にされないか心配になることもあります。でも、もしかしらみんなが聞きたいことかもしれません。些細な疑問もそのままにせず、みんなの共通認識となるように明らかにしておきましょう。

⑤ 議論が台無しになるようなことを言わない



一見ムダになりそうな話でも、それが大事かどうかは議論の後に自然に決まります。「それ意味あるの？」というツツコミはやめましょう。

⑥ 否定をしない



議論の中では誰もが平等で、上も下もありません。「否定」は、その人を排除し、その後の発言を奪うことになります。様々なアイデアを出し合うことが大事なので、どんな意見も尊重しましょう。また、意見を出しやすいウェルカムな雰囲気をみんなで作りましょう。「私は話を聞いていますよ」と分かるよう、相槌を打ったり、顔を見て会話したりしましょう。

⑦ 議論が終わったら、議論の内容の話はしない



自分の意見は議論中に話し、その場で質問しましょう。あとからあだこうだ言わないようにしましょう。後悔しないように、議論の場で積極的にしましょう。

<参考・引用>

野村総合研究所 (2015) が米英の研究をもとに試算 (原典: Freya C.B. & Osborne M.A. (2013), "The future of employment: How susceptible are jobs to computerization?", Technological Forecasting and Social Change, Volume 114, January 2017, pp.254-280)

北川達夫・フィンランドメソッド普及会(2005)『図解 フィンランド・メソッド入門』, 経済界

ユネスコスクール活動紹介 昨年度はこんなこととしてました！

ユネスコスクールは、そのグローバルなネットワークを活用して、世界の学校と交流し、生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、共に未来を考えます。

異文化理解、エネルギー問題、経済問題、地域紛争問題などを体験や実践から学び、持続可能な社会構築を目指して諸問題に対応できるような力をつけようとしています。実践から学ぶためには、実際に社会活動を行っている様々な外部団体との連携が必要であり、校外学習にも力を入れていきます。



1 異文化理解プロジェクト

多様な文化や考え方を学ぶことで、他者を尊重する態度や、多面的な思考を育てます。実際の社会に関わりながら体験し、主体的・探究的に学ぶことができます。



<海外活動>

- (a) ロンドン修学旅行（高校2年 11月）
- (b) カナダホームステイ語学研修（中学3年 9月）
- (c) カナダ語学研修（中学生高校生の希望者 7月）

<国内活動>

- (a) イングリッシュ・キャンプ（中学1年2年全員 8月）
- (b) インターアクト部「国際交流会」（インターアクト部員 4, 10月）
- (c) 長野マラソン参加外国選手との交流会（中学生全員 4月）
- (d) キルギスの学校とスカイプ交流（高校1年 9月～）
- (e) ワールドフェスタ参加（中学生1.3年 例年11月、※台風被害のため2019年は中止）
- (f) 郷土料理保存会「ちょうまの会」との交流（中学1年生全員参加 10月）
- (g) 米国派遣記者 応募（中高一貫生 12月）
- (h) 一校一国成果発表補助（中高執行部 12月）



<関係団体紹介>

ちょうまの会 … 善光寺平の自然風土によって築かれてきた食文化を伝承する会。

Kids'ISO 14000 … 子ども達が主体的に21世紀を創るための環境教育プログラムの一つ。

ソロプチミスト … （公財）ソロプチミスト日本財団。奉仕活動に対する援助や協力を通じ、豊かな生活を実現し国際相互理解の促進に寄与する。

SEPC … 募金活動の一環として、乳幼児を育てるお母さんに英会話を通じて交流する本校インターアクト部の活動。（Speaking English with Parents and Children）

JICA … ODA（政府開発援助）実施機関。青年海外協力隊派遣などの開発途上国支援を行う。



2 環境教育・ボランティア教育プロジェクト

<全校生徒による活動>

- (a) 学校周辺地域の環境保全（6月）
- (b) Kids' ISO 14000への参加（中学生）
- (c) 長野環境標語大会（中学生）

<希望者による活動>

- (a) 長野マラソン・長野車いすマラソン大会補助員参加
- (b) 生徒会活動
 - ア) ソロプチミストグループと連携して地域清掃活動
 - イ) ソロプチミストグループと連携「環境フェア」参加
 - ウ) 「届けよう服のチカラプロジェクト」（9月～11月）
- (c) インターアクト部活動
 - ア) 各種募金活動（4, 10月）
 - イ) 社会福祉施設訪問支援（8, 11月）
 - ウ) 東北被災地支援活動・被災地商品等販売してその収益寄付（5～7月）
 - ・被災地訪問（石巻市の施設訪問及び被災者との交流）（8月）
- エ) SEPC（月一回）



3 地球規模の諸問題解決方策プロジェクト

- (a) 国際ユース作文コンテスト（6月）
- (b) 各種グローバルセミナー参加（中学生高校生の希望者）
- (c) 信州ESDコンソーシアム成果発表&交流会参加（中学高校代表者2月）
- (d) 社会科授業での啓発（中3 社会科公民的分野 高1政経）
 - ①地球環境、地域紛争等を学び、地球規模の諸問題認識とその解決方策の探求力を育成
- (e) 国際デーの設定（全校生 総合的な学習の時間）
 - 上記①を基に、プレゼン等を通じて課題解決力を育成
- (f) 国際月間（中学生徒会各委員会 9月～）
 - ①SDGs17の目標から、各委員でSDGs行動プランを実行し、協働的に探究し合いながら、全校の前でプレゼンすることを通して課題解決力を育成
- (g) 第11回ユネスコスクール全国大会への参加（国際理解教育委員長 12月）
- (h) ユネスコ寺子屋運動 ・書き損じハガキ収集（全校生7月・1月）
- (i) 文化祭内ユネスコスクールコーナー（信大留学生・東京大学学生・JICA他）

一般社団法人長野県新聞販売従業員共済厚生会

「第9回 学生記者海外派遣」 応募作品紹介その2

「コロナウィルスと人種差別」

文化学園長野中学2年 丸山 詩乃

13年間生きてきた中で多くのニュースを見聞きしました。その中で心に残っているニュースのほとんどは人種差別についてです。小さい頃私は人種差別は「昔にあった」というイメージを持っていました。しかし、年齢が上がるにつれ、差別は自分の身近にあると感じるようになりました。

直近ではアジア系の人への差別です。

他国でマスクをした日本人女性が、現地男性に暴行を受けた事件の記事を目にしました。この事件はマスクをしていると重症という外国のイメージと、アジアでコロナウィルスが流行しているという認識からの差別だと思います。

私はこの事件は、外国と日本の風習の違いの共通理解がされていないため発生したと考えています。

また、国内では、クルーズ船・大阪のライブハウスでの感染拡大が印象深いものでした。

クルーズ船に乗っていた人は、陰性の反応がでて船内から解放されても、周りから差別的な意識が向けられたそうです。

そして、この感染拡大から日本全国の学校が臨時休校になりました。この臨時休校により多くのイベント・行事が中止になりました。

行事中止で一番反対されたのは「卒業式」ではないでしょうか。本校でも中学・高校の卒業式が簡易的实施になりました。

私はSNSで過去や未来の卒業生に対して「うらやましい」という声を挙げている卒業生を見ました。

仕方ないことではありましたが、この判断は多くの卒業生の「思い出」をなくすことになったのではないかと感じます。

米国でウィルスがまん延する中で、「アジアの人々に対する思い」と「アジアの人々への差別に対する思い」の二つを取材し、この世界から「差別」をなくすためにできることを考え、実行したいと思います。

「学生記者海外派遣」は、長野県内在住の中学生10人と高校生10人を中高生記者として米国に派遣する、新聞販売業の皆様のご支援による「グローバルな視野を持った若者の育成」の企画です。2020年夏、約1週間訪問地で取材活動を行い、帰国後に書く記事が信濃毎日新聞に掲載される予定でしたが、今年度はコロナウィルスの影響により、派遣が中止されました。

前回に引き続き、応募作品を掲載します。今回は中学生の2人です。テーマは「私と新聞」です。

「本質の追求」

文化学園長野中学2年 工藤 心翔

私は、現代に生きる若者の一人である。現代社会は技術革新が進み、日々の新たな情報の中にいる。そこで疑問に思うことがある。「その情報が本当かどうかを見極める力が、私たちに備わっているか。」ということである。もちろん、物事には「絶対」ということはない。もし全人類がその能力を備えていたらこの世界はより生き易いものになっているはずである。しかし、そのことを意識することでこの世界が変わる可能性はゼロではなくなると思う。

ここに、先入観だけで物事を判断するA君そして真実は何かと追求するB君がいるとしよう。人は見たものを簡略化し、「自分」がとらえやすい方向へもっていくという悪い習性のようなものを持っているように思う。改めて自分と向き合ってみると、思い当たる節がいくつかある。ただ漠然と生きていた私には自分のことがひどく嫌いになった出来事がある。私はA君だったのだ。そこから中々立ち直れずにいたが、新聞のある記事がきっかけで人生が好転した。それは一切の先入観なく事実を追求したものだった。

「相模原殺傷事件死刑判決」を受けて書かれた、ある社会学者の問題提起の記事である。「人間は本源的に信じがたいほど他者を信頼し、相互に依存しあう生き物である。」弱者は救われてよいのだと私は思う。互いに信じあうことで救われるのだと気付かされた。

自分自身もそうだったが、事実だけでは面白くないと勝手に色づけてしまい、人を傷つける。自分にはそんなつもりはなくても。「面白いだけが正義なのか」と言われて返す言葉がない。何が大切なのか。何が真実か。それを見極めることがとても大事であると私は思う。私達が当たり前として利用している「情報」は時に「人生を揺るがす兵器になりかねない」ということを肝に銘じ、これからも私は「新聞」というメディアと向かい合うつもりである。